

『楞伽經』の形態的成立史論 ―内部構造と原型への視点―

著者	久保田 力
雑誌名	論集
巻	11
ページ	67-96
発行年	1984-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129737

『楞伽經』の形態的成立史論

——内部構造と原型への視点——

久保田 力

I 序

II 『楞伽經』の内部構造 —— 散文と重頌の關係から ——

III 結論——原型と成立史への視点

I 序

『楞伽經』は、周知の通り、後代の中観、唯識思想双方に大きな影響を与え、また、如来藏思想上にも重要な位置を占める中期大乘經典である。しかしながら、従来より指摘されているように、經中に盛り込まれている思想は、その豊富さにも拘らず、ほとんど組織的ではなく、個々の教説の寄せ集めであり、覚書きである^{メモランダム}とされている⁽²⁾。古来の註釈家たちや近代の諸学者によって『楞伽經』整理の試みはなされてきたが、この經典に関する限り「他の諸經典のように、起承転結、主題の展開を科文によって示す」ということは、おそらく不可能であり、あえて

実施してみたところで、経の理解に資するところはほとんどなからう⁽³⁾と考えられている。

『楞伽經』の最初の体系的研究者であつた鈴木大拙博士の方法論は二つあつた。一つは梵本や各種訳の分章や分節に執われず、「原典の随所に乱雑に散見する同系の諸項を摘出し、之を収集することによって」この經典の組織を再現しようとするものである⁽⁴⁾。もう一つは、かつては『楞伽經』を所依の經典とした禪宗の歴史と思想との關係において研究し、再評価しようとするものである⁽⁵⁾。鈴木博士の究極的立場は後者にあつたことは明らかである⁽⁶⁾。『楞伽經』研究史のほとんどは、鈴木博士の第一の方法論に基づくもの、あるいはその延長線上にあるものといつてよい。その場合、諸学者の主眼点は、註釈家たちによって経の主題と言われ続けてきた五法・三性・八識・二無我の教説に代表される唯識思想及び、その実践原理である自内証聖智(*pratyakhyatya*)、そしてアーラヤ識との同一視で画期的である如来藏思想に置かれてきた⁽⁷⁾。この種の研究の成果により、『楞伽經』全体の思想的特徴や、その仏教史上における位置は、徐々に明確になりつつある。しかし、このような個別的テーマによる個別的研究は、經全体を一様のものとして扱いがちなため、拾い集められた断片的トピックの間に矛盾や断絶が起る場合、それを処理する手段を失いがちで、牽強付会となる危険性もあろう⁽⁸⁾。そして、この種のテーマ別個別研究を積み重ね、つなぎ合わせたとしても、経の部分的な特徴はより明瞭に浮き彫りにできるにせよ、『楞伽經』本来の姿は復元できるとは限らない。むしろ、經典の原初形態における、より正確な、歴史的な思想理解はできにくくなるものと思われる。それ故、一見、無組織と見えるものであってもこれをもう一度成立史的観点から検討し直し、でき得れば經全体を貫く内的構造を、經典自体の中に探していくことが必要であり、重要であると考ええる。本論文はそのような意図に立つてなされた、『楞伽經』の原型と成立過程を再考するための模索的な第一歩である。

II 『楞伽經』の内部構造 —— 散文と重頌の関係から ——

『楞伽經』には三種の漢訳が現存している。すなわち、求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』四卷（四四三年訳出、宋訳）、菩提流支訳『入楞伽經』十卷（五一三年訳出、魏訳）、実叉難陀訳『大乘入楞伽經』七卷（七〇〇—七〇四年訳出、唐訳）である（いずれも、大正藏第一六卷所収）。従来、『楞伽經』成立史の通説として、梵本でいうと第一章「ラーヴァナ王勸請品(Rāvaṇādhyeśanā)」と第九章「ダラニ品(Dhāraṇī)」と第十章「偈頌品(Saṅgāthakam)」の三章は、宋訳には欠けているために後代の付加であるとされる。また、第八章「食肉品(Māṃśabhakṣaṇa)」も、宋訳には簡単ながら存在するが、前述の三章と同様、その文体、内容共に経本体部とは異質的であり、これも付加ではないかということが言われている。⁽⁹⁾しかし、第十章「偈頌品」については、別行の一異本説もあり、問題を多く含む部分である。⁽¹⁰⁾

前記の、付加とされる三章を除いた宋訳相当分は經典の本体部といえる。一般的に、これが『楞伽經』の「原型」であるとされる。この本体部の構成は、長行の散文部分と、重頌(geya)の偈部分とで成り立つ小節を基本的単位として組織されている。各節は、大旨、对告衆たる大慧(Mahamati)の所問に世尊が応答する形式であり、各節間には全くストーリー性はなく、様々の主題がモザイク風に続く。⁽¹¹⁾我が国の虎関師鍊(一二八七—一三四六)は、このような節を八六段に分段して宋訳に対する註釈書『仏語心論』⁽¹²⁾を著した。科文による縦割りの解釈よりも、師鍊による並列的な分段の方が、「本経を読むには最も合理的な方法」⁽¹³⁾であろう。『仏語心論』の分段を利用して、高崎直道博士は経本体部の約四分の一を解説されているが、ここでは、博士の研究を踏まえた上で、経本

体部を七二節に分節するのが適當と考えた。⁽¹⁴⁾ 次表一は、梵本の分章と師鍊の分段と、筆者の分節とを対照させたものである。

經本体部を読み進めていけば、ある節では重頌が欠如していたり、ある節では重頌としては散文内容にそぐわないものがあつたりすることなどに気づく。重頌 (geya) として機能する限りは、それが散文内容と密接に相応すべきであらう。⁽¹⁵⁾ しかし、『楞伽經』では散文と重頌とが奇妙な不調和を示している節が往々にして見られるのである。このことは、非組織的だとされるこの經典の構成を、ますます複雑にする結果となっている。では、一体何故このような現象が生じたのであろうか。推測されることは、散文と重頌との間には何らかの成立史的な断層があつたのではないかということであらう。そこで、ここでは、予想される成立史的断層の実態を、散文と重頌との係わり具合に照明をあて、節ごとに新たなメスを入れながら、いわば經本体を解剖することによって検査したのである。そして、その内部構造から推定できる成立史への視点を模索してみた。

さて、經本体部の諸節は、重頌の特徴から次の四種類に分類できることは明白である。

一、重頌を有さない節

二、重頌を有するが、その重頌全てが「偈頌品」に再録されていない節

三、重頌を有するが、重頌が「偈頌品」に再録されるものとされないもの双方を含む節

四、重頌を有し、その重頌全てが「偈頌品」に再録されている節

以下に、順次に、各種の節の構造的特色を検討しよう。

表一

a 梵本 分章	b 師鍊 分段	c 筆者 分節	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	
2	1	1	16	13		31	27		46	39		61	54	3	76	63		
	2	2	17	14		32	28		47	40		62	55	4	77 78	64		
	3	3	18	15		33	29	2	48	41		63	56					
	4	4	19	16		34	30		49	42		64		5	79	65		
	5		20	17		35	31		50	43		65	57		80	66		
	6	5	21	18		36	32		51	44		66	58	6	81	67		
	7		22	19		37			52	45		67	82		68			
	8	6	23		2	38		53	46	3	68	59	83	69				
	9		24	20		39	33		54	47		69		84	70			
	10	7	25	21		40	34	3	55	48		70	60	7	85	71		
	11	8	26	22		41	35		56	49		71	61	8	86	72		
	12	9	27	23		42	36		57	50		72	62					
	13	10	28	24		43			58	51		73						
	14	11	29	25		44	37		59	52		74						
	15	12	30	26		45	38		60	53		75						
○梵本の各章中の節数。()内は師鍊の分段数。																		
第2章43節(1~50)、第3章20節(51~76)、第4章1節(77~78)、第5章1節(79)、 第6章5節(80~84)、第7章1節(85)、第8章1節(86)																		

一、重頌を有さない節

この種の節は、表二のように、二一節を数え、全体の約三割を占めている。

これらの諸節は、第七〇節以外は、全て第二章「三万六千一切法集品(Saṭṭhiṇṣaṭṭhasārasaravādharmasamuccaya)」中に現われている。⁽¹⁷⁾

ところで、『楞伽經』本体部を構成する諸節は、先述したように、大慧の所問に世尊が応答するという形式を取っているのだが、重頌を有さない諸節の多く(一五節)は、所問形式を取らず、世尊が自ら説明し始めるという破格の形式を取っていることは注意すべきである。

また、所問形式を取る場合、この経では普通、次のような形式で始まる。

「『世尊よ、私に…を説いて下さい。(善逝よ、私に説いて下さい。)その…によって、私と他の菩薩・摩訶薩たちは…となるでしょう(できるでしょう)。』」

世尊は言った。『それでは、よいか大慧よ、よく聞きなさい。そして、よく思いをめぐらしなさい。私は汝に説明しよう。』

『わかりました、世尊よ。』と(言って)、大慧菩薩・摩訶薩は世尊に耳を傾けた。

世尊は彼に次のように言った。…」

ところが、所問形式を取っているように見える諸節(六節：第一、七、十、二七、三〇、七〇節)においても、右のような基本形式を取らず、大慧が自由な形式で質問をした後、「世尊は言った。…」とする、いわば簡略形しか

表二

節	主 題	節	主 題
1	識の生住滅	14	2 種の一聞提
2	7 種の自性と 7 種の勝義	16	二 無 我
3	自心所現の幻の如き境の考察	21	偉大なヨーギンの 4 種の条件
5	聖智の 3 つの相	25	如来の説法
		27	涅槃
7	自心現流浄化の頓漸	28	自性への 2 種の執着
8	仏の三身	30	縁起説と因果説
9	声聞重の 2 種の教義	38	菩薩の 2 種の覚
10	仏教と外教の常住不可思議説	39	大種と大種所造
11	輪廻と涅槃	40	五 蘊
12	一切法不生	70	六波羅蜜 ¹⁶

表三

章	節	重頌数	主 題	章	節	重頌数	主 題
2	17	1	増益と損減	3	60	10 ¹⁸	22種の涅槃論
	19	2	空性・不生・不二・無自性		63	5	7 種の無常
3	47	1	釈迦牟尼仏と過去仏の平等性	5	65	3	如来常無常過(品)
	55	2	縛と解脱	6	68	2	如来はガンジス河の砂と同じ
	57	3	唯識が知たること	7	71	5	仏説離過(変化品)
	58	1	宗通と説通	8	72	24 ¹⁹	断肉食(品)

現われていない。つまり、重頌のない諸節では、世尊自説の破格形式が支配的であり、それ以外の節でも簡略形式しか見られないという特徴がある。

一方、内容的にみると、七種の自性と勝義(第二節)、法性仏・等流仏・變化仏の三身説(第八節)、二種の一闍提(第一四節)などという、この經典独自の教理が(註釈的文体で)述べられているのが特徴的である。

二、重頌全部が「偈頌品」に再録されていない節

重頌を有するが、それらの重頌が全て「偈頌品」に再録されていない節は、表三の如く一二節あり、節数の上からは全体の二割足らずを占めているに過ぎないが、その文量は少なくなく、第四章「現証品(Abhisamayā)」を除く残り六章全てにわたっている。

これらの節では、先の一の諸節と異なり、大慧の所問なしに世尊が自説する破格形式は全く見られない。しかも、ほとんどの節は、先述した基本形式に基づいた形式となっているのが特徴的である。

また、この種の節は、概して第三章以降の、經本体後半部に集中しているといえよう。表三の通り、第三章(二〇節)中の六節(三割)、第六章(五節)中の一節、それに一章が一節である第五章、第七章、第八章に現われている。第二章(四三節)中の二節(第一七、一九節)は、むしろ例外的な存在であると思われる。しかも、それらの二節中の重頌(二―一三五、二―一三七・一三八)の位置をみると、他節のように散文末尾に配置されるのではなくて、散文の途中に置かれ、そのあとにも散文(世尊の説明)が続くという形式的にも例外的な存在である。

では、以上のような諸節における散文と重頌とは如何なる関係にあるのだろうか。まず、例を第五八節に取り、全經文を引用して検討することにしよう。

△さらにまた、大慧よ、凡夫・異生たちは、無始時來の戲論たる汚れた自らの妄分別を抱いて、劇場で舞いながら、独自の究極的理趣 (*svasiddhānta-māyā*) と言教 (*desanā*) (の理趣) に精通しておらず、自心所現たる外界の相に執着し、方便たる教説の文句に執着しており、清淨なる四句の理趣である独自の究極的理趣を熟知しない。」

大慧は言った。「世尊よ、あなたが説かれるその通りです。世尊よ、私に言教と究極との理趣の特徴を説いて下さい。それによって、私と他の菩薩・摩訶薩たちは、未來時に、言教と究極との理趣に精通し、外教や声聞、独覺乘に属する惡理論家たちによって惑わされなくなるでしょう。」

世尊は言った。「それでは、よいか大慧よ、よく聞きなさい。そしてよく思いをめぐらしなさい。私は汝に説明しよう。」

「結構です、世尊よ。」といって、大慧菩薩摩訶薩は世尊に耳を傾けた。

世尊は彼に次のように言った。「大慧よ、過去・未來・現在の如来・応供・正等覺者たちの法の理趣 (*dharma-māyā*) は二通りある。すなわち、言教の理趣 (*desanā-māyā*) と独得の究極的理趣 (*siddhānta-pratyavasthāna-māyā*) とである。大慧よ、このうちで、教説文句の理趣とは、すなわち、種々の資糧 (道へ) の經典中の教説であり、諸々の衆生のために、信心に従って、説き示されるものである。また、このうちで、大慧よ、究極の理趣とはどういうものかといえは、それによって、ヨーガ行者たちが自心所現に対する妄分別を捨て去るよう

になるものである。すなわち、一・異・俱・非俱の主張に陥らず、心・意・意識を越えた、自内証の聖なる境界であり、理由や理論や見解の相をはなれ、無と有との二辺に陥った外教徒、声聞・独覺乘に属する全ての悪理論家たちによつては味われないもの、それを私は究極のもの（理趣）と呼ぶ。以上が大慧よ、究極の理趣と教説（の理趣）との特徴である。それについて、汝と他の菩薩・摩訶薩たちは修学すべきである。」

ここで、次のようにいわれる。

（六一） 私には実に、二種の理趣がある。究極と教説とである。私は、凡夫たちには後者を、ヨーガ行者たちには究極を説く。（*mayo hi dvividho mahyaṃ śiddhānto dśanā ca vai/ desanā yā balānā śiddhāntaṃ yogināmaham* //）（以上、南条本、一七二頁十行―一七二頁終）

この五八節の重頌第六一偈は、右の経文を読めばすぐにわかるように、散文の内容と完全に重なり合っており、散文を要約した形のものであり、まさしく、正しい意味での重頌と呼ぶにふさわしいものである。つまり、散文は、意味的に重頌を包摂しているのである。これを「散文U偈」型と呼び、図Aのように図示する。

そして、調査の結果、今の第五八節以外の、この種の節においてもまた、図A形の如く、散文が重頌を完全に包摂している構造となっていることが判明した。ただし、第六〇節と第七一節と第七二節の三節においては、重頌は、他節のように、散文の要約という形では完全に包摂し切れていない。重頌の数も他節より多くなっている。また、諸本間にも異同出入が多い。これら三節のうち、第六〇節と第七二節とは、それぞれ、『提婆菩薩釈楞伽經中外道小乘涅槃論』⁽²⁰⁾、『楞伽阿跋多羅宝一切仏語断食肉章經』⁽²¹⁾として別行していた形跡がある。また、第七一節（＝第四章）は、経中に既に説かれていた諸説・重要事項を、解深密（密意を解く *saṃdhi-nirmocana*）という形で総

括している特異な一節であり、一章（「変化品」⁽²²⁾）である。従って、これらの例外的な三節は、経本体部とは何らかの異質的な部分であると言わざるを得ない。それらの節では、重頌は散文の要約というよりも、やや独立的な地位を占める要素が大きくなっているのである。

三、重頌が「偈頌品」に再録されるものとされないものの双方を含む節

重頌を有しながらも、それらの重頌のうちのいくつかが「偈頌品(Sagāthakam)」(偈番号を示す時は、以下S.と略)に収録されていないものを含む節は、全節中、四節存在する。⁽²³⁾これらの節の重頌及び、「偈頌品」再出偈との対照をも合わせて表記すると表四の如くなる。このうち、初め三節は第三章「無常品(Anityata)」中に、残り一節(第六六節)は第六章「刹那品(Kṣaṇika)」に出ている。これらの節においても、世尊自説の破格形式は見られない。

さて、この四節における散文と重頌との関係はどのようなであろうか。第五二節を例に取って検討してみよう。まず、節全体をここに訳してみる。

〈実に、その時、大慧菩薩摩訶薩は、世尊にこのように言った。「世尊によって、また、『菩薩・摩訶薩、および他の者たちは、ことば通りに意味を取ってはならない(yatharūpānugrahanam na kartavyam)』と、このように言われました。しかし、世尊よ、菩薩・摩訶薩は、どうしてことば通りに意味を取る者ではないのですか。そして『ことば』(mūla)とは何であり、『意味』(artha)とは何ですか。」

世尊は言った。『それでは、よいか大慧よ。よく聞きなさい。そしてよく思いをめぐらしなさい。私は汝のた

めに説明しよう。」

「結構です、世尊よ。」といって、大慧菩薩摩訶薩は世尊に耳を傾けた。

世尊は彼に次のように言った。「このうち、大慧よ、『ことば』とは何かというと、すなわち、言語と文字が結合した分別であり、歯や顎や口蓋や舌や唇や口腔が相互に（作用して）発せられた音声（*śabda*）であって、分別の習気を因とするものが『ことば』といわれる。

また大慧よ、このうち、『意味』（に精通する者）はどういう（者）かというと、すなわち、聞・思・修によって成り立つ智慧（*prajñā*）によって、独り寂所に行き、涅槃の城へ赴く求道者にして、自覚（*svabuddhi*）によって、まず、習気の所依を転じ、自内証の境地に住し、他の諸地の殊勝性や意義の特相の境界を察知する菩薩摩訶薩は、『意味』に精通した者なのである。

またさらに、大慧よ、『ことばの意味』に精通した菩薩・摩訶薩は、ことばは意味と別でもあり、同じでもありと観知する。そこで、よいか大慧よ、もし意味がことばと別であれば、ことばは意味を顕わす因とはならなくなろう。ところが、その意味はことばによって知られるのである。灯によって財宝（のありかが知られる）如くにである。例えば、大慧よ、或る者が、灯を得て後に、『これが私の宝だ。このようにここに（ある）。』と、財宝を発見するはずであらうように、まさに同様に、大慧よ、言語（音声）の分別たる『ことば』という灯によって、菩薩・摩訶薩たちは、『ことば』の分別をはなれ、聖なる自内証の境界を熟知するのである。

さらにまた、大慧よ、不滅、不生、本来般涅槃、また、三乗、一乗、五（法）、心、（三）自性などに対して、ことば通りに意味に執着するならば、増益や損減の見方に陥る者となろう。あたかも、種々なる幻を見て妄分

別するように、別々に設定された（それら）を、別々に妄分別しているのである。大慧よ、例えば、種々なる幻が様々に見られるものだから、愚者たちは、（それを）別々に妄分別するが、聖者たちによってはそうではないように。

ここで、次のようにいわれる。

（三四） ことば通りに（意味を）妄分別して、（不滅、不生などの）法性を増益するので、彼らは、実にそれ（法性）の増益によって、地獄の底に落ちるのだ。（*yathārāṃ vikalpiṭvā samāropenti dharmātmā te ca vai tatsamarōpāṭaṇi narakāgrye* //）

（三五） 我は決して諸蘊として認められず、また、諸蘊も我の中には（ない）。それらは、妄分別される如くには（存在し）ないし、また、それらは存在しないのでもない。（*na hyātma vidyate skandhaiḥ skandhāś-caiva hi nātmāni/na te yathā vikalpante na ca te vai na santi ca* //）

（三六） 愚者たちによって妄分別される如く、もし、一切の存在が実在するものであり、それらが見られている如くに存在するならば、全て（の者）は真実を見る者となろう。（*asītuṃ sarvabhāvāṇi yathā balirvikalpate/yati te bhavedyathā dr̥ṣṭvā sarve syustatvadarśinah* //）

（三七） （また、逆に）一切諸法が非実在であれば、雑染も清浄もない。それら（諸法）は見られた如くには（存在し）ないが、また、それらは存在しないのでもない。（*abhāvāsarvadharmāṇāṃ samkleśo nāsti sūdhāśca/na te tathā yathā dr̥ṣṭa na ca te vai na santi ca* //）（以上、南条本、一五四頁七行～一五六頁十行。）

表四

段(師鍊)	節	重頌総数	重 頌 対 照	主 題
59	52	4	3-34 35 36 37 S-× 135 136 137	語の如くに意味 を取るべきでないこと
63~64	56	10	3-48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 S-91 × × 79 86 94 199 200 207 208	一切法の自性と 不生について
71	61	7	3-79 80 81 82 83 84 85 S-63 64 × 500 501 × ×	仏の自性
80	66	4	6-1 2 3 4 S-× 708 715 433	如来蔵・アーラ ヤ識説

表五

章	師鍊 分段	節	構造 類型	重頌 總数	散文と關係 する偈。偈中句		44	37	C	3	
2	4~5	4	D	26	127、128	2	48	41	A ⁽³⁵⁾	3	179、181
	8~9	6	B'	5			49	42	C	21 ⁽³⁶⁾	(183、184)195a
	16	13	E	4			50	43	C	8	203~205、 208~210
	18	15	A	1		3	51	44	C	2	2cd
	21	18	D(A?)	1			52	45	A	2	
	24	20	E	1			53	46	A	1	
	26	22	D	5			55	48	A	2	
	27	23	C	4 ⁽³²⁾			56	49	D	6	
	28	24	C	12 ⁽³³⁾			57	50	AE ⁽³⁷⁾	5	15
	30	26	B'	4			58	51	E	14 ⁽³⁸⁾	
	33	29	A'	1			60	53	E(C?)	6	(38、39、 41~43?)
	35	31	B'	2	61		54	E(C?)	2	44ab	
	36~38	32	C	2	166		67~69	59	C	7 ⁽³⁹⁾	63、64、66~69
	39	33	A	1	168 ⁽³⁴⁾		72~75	62	D(E?)	32 ⁽⁴⁰⁾	93、94
	40	34	A'	1	4		77~78	64	B'	7 ⁽⁴¹⁾	
	41	35	C	1		6	81	67	A'(B?)	2	
	42~43	36	C	3			83	69	D	9	
					173、175d						

図 A.〔散文⇔偈〕

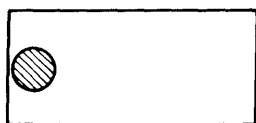


図 A.′〔散文⇔偈〕



図 B.〔偈⇔散文⇔特定偈〕

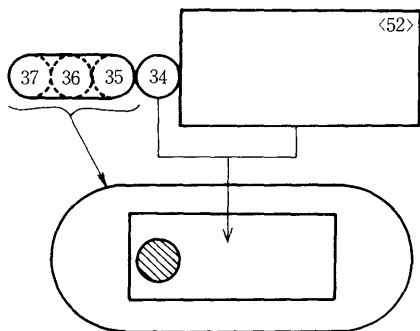


図 B.′〔偈>散文⇔特定偈〕

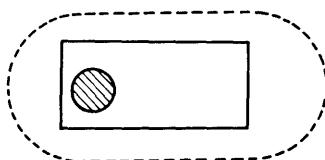


図 C.〔偈>散文⇔特定語句〕

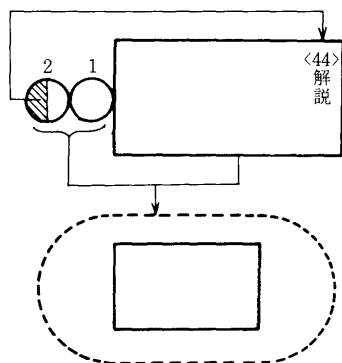


図 D.〔散文⇔偈〕

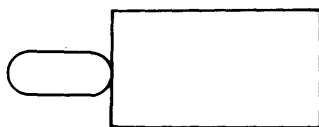
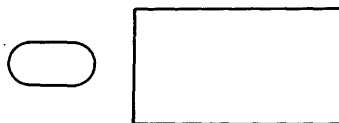


図 E.〔散文≠偈〕



○ は偈を、□ は散文を表示する。

この第五二節の重頌四偈のうち、散文内容と直結しているのは、右訳に見られる通り、第三四偈であろう。第三四偈の中には、十分に散文の思想が反映されていると言つてよい。ところが、あとの三偈(第三五―三七偈)では、少しく意味合いが異なることに気づく。ここでは、諸蘊や我が、「妄分別される如くには」(*yatha vi-kalpyate*)「存在せず」(第三五偈)、一切諸法も、「見られる如くには」(*yatha dīṣṭi*)「存在しないことを説いて」(第三六、三七偈)、第三四偈中の「ことは通りに」(*yatha nūram*)という語句と類似表現が見られるものの、散文内容の要約ということはできず、基調レベルで一致しているにすぎない。むしろ、それらは、散文思想の展開であり、この節にだけ適用されるべきものではなくて、逆に、散文思想を包摂するようなものである。

これら後の三偈は、「偈頌品」においては一連の続いた偈であり、世親造とされる『釈軌論(Vyakhyā-yukti)』中にも、余経の所説として、その順序通りに引用されている⁽²⁵⁾。

このようにみてくると、第五二節では、散文及び第三四偈と、第三五―第三七偈とは、意味的包摂関係としては大きく二つに分けて考えることが可能である。そのとき、散文要約偈たる第三四偈のみが「偈頌品」に再出しないことは注目されるべきである。

今、第五二節の構造を图示すれば、図Bのようになる。これは「偈U散文U特定偈」型といえよう。(図中、上の図は節の物理的形態を、下の図は意味的包摂関係を示す。以下同様。)

さて、残りの三節(第五六・六一・六六節)においてもまた、調査の結果、その構造は図Bとほぼ同様のものであるとみてよいと思われる。ただ、第六一節と第六六節では、「偈頌品」に再録されない偈と共に、再録されている偈もいくつか(或いは偈中の語句)も、散文と呼合するものを有している⁽²⁶⁾。特に第六六節は、如来

藏・アーラヤ識同一説として有名な箇所であり、先の第五二節の「ことば通りに意味を捉えてはならない」という主張と共に、『楞伽經』の主要教義の一つであることは注目されてよい。⁽²⁷⁾ その場合、如来藏とアーラヤ識とを同一視するのは散文においてであり、重頌ではない。第六六節の重頌は先表四のように四偈あり、そのうちの第一偈が「偈頌品」に再録されない。この偈のみが「如来藏」を説き、あとの三偈では（正しくは第二偈と第四偈の二偈）「心(citta)」のみが説かれている。しかも、重頌では自性清浄なる如来藏の面は説かれず、専らアーラヤ識の面だけ現われている。『楞伽經』の他の箇所で見られる「心」は普通アーラヤ識のことを指すのであるから、もし、この第一偈がなかったとすれば、重頌部分では如来藏は現われないことになる。換言すれば、「如来藏」という句が見え、「偈頌品」に再録されていない第一偈と、「心」という語が見える残り三偈とを合わせて、しかも散文を照合して解釈することによってのみ、如来藏＝アーラヤ識説が重頌で成り立つのである。⁽²⁸⁾

以上のように、「偈頌品」に再録されるものと再録されないものを重頌として持つ節においては、『楞伽經』の独自性を示す重要教義の一端が表明されており、その際、散文と密接に呼合するのは「偈頌品」に再録されていない重頌なのであって、再出する重頌は散文の要約偈というよりも、むしろ逆に散文思想を包摂するような広い意味を有するものとなっている、という構造的な特色が浮かび上る。

四、全重頌が「偈頌品」に再録されている節

重頌を有し、しかもそれらの重頌全てが「偈頌品」に再録されている節は、今まで検討してきた一から三の節以外の残りの節であり、数の上では、全七二節中、三五節で、約半数を占めている。章ごとの配分は、第二

章（四三節）中に二一節、第三章（二〇節）中に一一節、第四章（一一節）、第六章（五節）中に二節となっている。つまり、經本体部中でも、平均して散在しているといえよう。（特に第二・三章中）

さて、これらの節における散文と重頌との関係は、かなり複雑になっている。そこには、二で検討した「散文U偈」型（図A）や、三の「偈U散文U特定偈」型（図B）に類似した構造と共に、それらでは割り切れない関係を持った構造も見出されるのである。また、形式的にも、破格形、基本形、簡略形が混合しており、先のようには処理できなくなっている。しかし、そういう複雑な関係の中でも、子細にみていくと、注目すべき構造が、いくつか浮かび上がってくるのがわかる。そのうちの 하나가、次の、第四四節に見られるものである。まず、第四四節の全文を引用して検討しよう。

へその時、実に、世尊は、さらにまた大慧菩薩摩訶薩にこのように言った。「大慧よ、意成身（*manomayakaya*）の状態の区別相を、私は説明しよう。よく聞きなさい。そして、よく思いをめぐらしなさい。私は汝に解説しよう。」

「結構です、世尊よ。」と大慧菩薩摩訶薩は、世尊に耳を傾けた。

世尊は彼にこのように言った。「大慧よ、意成身は三種類ある。三種類とは何かといえば、すなわち、（一）三昧の樂に安定する意成身（*śamādhisukhasamāpatti-m.*）⁽²⁹⁾、（二）法の自性を覚知する意成身（*dhammasubhāvaabodha-m.*）、（三）種姓と俱生する行所作の意成身（*nikayasahajasaṃskāraṇīya-m.*）である。修行者たちは、初（地）から順に上々の地の相を熟知してゆけば、（それらを）体得する。

このうち、大慧よ、（一）三昧の樂に安定する意成身とは何かといえ、すなわち、第三、四、五地において、自

らの種々なる心をはなれて住することにより、心たる海に転ずる波（の如き）識を相とした楽に安定する意が生起しないもので、自心所現たる対象の有・無を熟知するから、（三昧の樂に安定する）意成身といわれるのである。

このうち、(二) 法の自性を覚知する意成身とは何かといえ、すなわち、第八地において、幻等の法が無相（*nirābhāsa*）たることを觀察し覚知することにより、心の所依を転じて、如幻三昧を得、また、他の諸三昧を得るから、無数の相と自在力と神通という花で飾られ、意いの如く迅速なるものであり、幻・夢・影像のような大種所造ではないが、大種・大種所造のように種々一切の色形体を有し、全仏国土の集會に随行する身体であつて、法の自性を体得するから、（法の自性を覚知する）意成（身）といわれる。

このうち、(三) 種姓と俱生する行所作の意成身とは何かといえ、すなわち、一切仏法の自内証たる安樂なる相を覚得できるから、種姓と俱生する行所作の意成身といわれる。

大慧よ、汝はこの三種類の（意成）身の特相について修學すべきである。」
ここで、次のようにいわれる。

(一) 私には、大乘は乗でもなく、音声でもなく、文字でもなく、諦でもなく、解脱でもなく、さらに、無相の境界でもなく。⁽³⁰⁾ (*na me yānam mahāyānam na ghoṣo na aksarāṇi na satyaṁ na vimokṣaṁ vai na nirbhāsagocaram* //)

(二) しかし、大乘は乗であり、三昧に自在なる力を有する。そして、種々の意成身は、自在力の花によって飾られる。 (*kinītu yānam mahāyānam samādhiśāntarīti/ kyo manomayacītro vastūbhūṣṭamanīṭah* //)

(以上、南条本、一三六頁初～一三七頁終。)

重頌第一・二偈は、それぞれS・一八八・一八九に対応しており、セットとなっている。

この第四四節の重頌は、右のように、散文の要約ではあり得ない。しかも、第二偈においては、「自在力の花によって飾られる」のは「種々の意成身」であるが、散文においては、それは「(二)法の自性を覚知する意成身」に限定されている。従って、この節では、散文を要約したものが偈ではなく、偈を註釈的に説明したものが散文だというべきであろう。偈中の「種々の意成身」が、散文では「三種類の意成身」として分類解説されていると解釈する方が自然である。

このように、偈中には、散文にはなかった新しい要素を含み、従って、偈の方が、意味的には散文を包摂しており、一方、散文の方は、偈中の特定語句を註釈的に解説した形となっている本節の構造は、図Cのように図示できるだろう。これは、「偈√散文↑特定語句」型といえる。

この図C形の構造を持った節が、筆者の調査した限りでは、後に表示するように(表五)、右の第四四節を含めて十節を検出できるのである。(それら十節の中にも、散文は、重頌中の特定語句とのみ重なり合い、重頌群全体の意味と比べると、包摂関係がほとんど認められない場合があるが、煩雑さを避け、ここでは、そのような場合も含めて図C形とする。)

この他の節は、大旨、次の五つの構造類型に収めることができると思われる。(紙数の都合上、節の引用は省略する。)

- (イ) 先に二で検討した、「散文∪偈」型。(図A形) 五節。

- (ロ) しかし、(イ)の型ほどには散文が偈を包摂し切れていない〔散文∩偈〕型。(A'形と呼ぶ。図A'参照。)五節。
- (ハ) 先の三で検討した、「偈∩散文∩特定偈」型ほど明確な包摂性が、特に偈∩散文に見られない、「偈∨散文∩特定偈」型。(明確な図B形の構造の節は検出できなかったため、これをB'形とする。図B'参照。)四節。
- (ニ) 散文と偈とが、思想の全体的基調レベルでのみ合致しているにすぎない、「散文⊖偈」型。(D形と呼ぶ。図D参照。)六節。
- (ホ) 散文と偈との間には、ほとんど必然的な連絡が認められない、「散文≠偈」型。(E形と呼ぶ。図E参照。)五節。

以上、重頌が全部「偈頌品」に再出する諸節における六種の構造類型(図C形と(イ)～(ホ))を、各節の重頌総数と共に一覧してみると表五のようになる。(もちろん、實際上、どの類型に属するか判断に苦しむ節もいくつか存在した。これは、筆者の読解力の問題と共に、原文の異同の多さによる。しかし、Jāṇasrībhaddaや師鍊等の註釈者、そして、現代の諸訳者でさえも、時には重頌を独立に分節させたりしているという事実、散文との包摂関係の困難さを物語っているといえよう。)

表五を見て理解できるように、A形〔散文∩偈〕及びA'形〔散文∩偈〕の構造を持った節では、問題の残る第四八節を除けば、全て、重頌を一∩二偈しか有していない。また、B'形〔偈∨散文∩特定偈〕の構造の節、つまり、第六、二六、三一、六四節では、重頌数はそれぞれ五、四、二、七偈と、比較的増えている。C形〔偈∨散文∩特定語句〕構造の節、第二三、二四、三二、三五、三六、三七、四二、四三、四四、五九節では、重頌数は

それぞれ、四、一二、二、一、三、三、二一、八、二、七偈とまちまちであるが、重頌数の多い節も登場していることが目をひく。D形〔散文S偈〕構造の節、第四、一八、二二、四九、六二、八三節の重頌数はそれぞれ、二六、一、五、六、三二、九偈とかなり多い節が目立つ。そして、E形〔散文H偈〕構造の節（第一三、二〇、五八、六〇、六一節の五節。重頌数はそれぞれ、四、一、一四、六、二偈。）が存在すること自体、奇妙である。

III 結論 — 原型と成立史への視点 —

以上、『楞伽經』の本体部たる第二章から第八章までを構成する全七十二小節の構造類型を、散文と重頌の関係に焦点をあてて検討した。これによって得られた特徴を簡潔に要約しておこう。

一、重頌を全く持たない節（二二節）は、ほとんどが第二章中に現われ、大慧の所問なしに世尊が自説するという破格の形式が取られ（そうでない場合でも基本形式の簡略形）、経独自の教理が説かれているが特徴的である。

二、一方、その他の重頌を有する節のうち、重頌が全て「偈頌品」に再録されていない節（一二節）は、第三章以降の経本体後半部に多く現われ、世尊自説の破格形式はなく、全て基本形式か、それに基づく所問形式を取っている。このうち、三節（第六〇、七一、七二節）を除いて、他の節の重頌数は比較的少なく（一―五偈）、重頌は完全に散文の要約偈（〔散文U偈〕A形）となっている。例外の三節は、別行していた形跡があったり（第六〇・七二節）、経中の諸説の統括という独立的な地位を占めていたり（第七一節）するもので、経本体部とは異質的な部分であると考えられる。

三、「偈頌品」に再録されるものとされないものの双方を重頌として持つ節は四節存在し（三節は第三章中、一節

は第六章中)、ここでも世尊自説の破格形式は見られない。この種の節においては、「偈頌品」に再出しない偈が散文の要約的な偈となっており、再出する偈は、逆に、散文を意味上包摂する構造（「偈U散文U特定偈」B形）となっている。（第六六節の如来蔵説は思想的に重要。）

四、全ての重頌が「偈頌品」に再録されている節は、全体の約半数（三五節）を占めており、それらは大旨、六種の構造類型に分類することができる。（形式的には、破格も含めて種々の形が混合していて、割り切れない。）その中でも、注目されるのは、重頌は全体として散文を包摂し、散文の方は重頌中の特定語句を註釈的に解説した形となっている構造（「偈V散文↑特定語句」C形）であり、十節（この種の節の約三分の一）認められる。

一方、重頌を一―二偈しか持たない節では、「散文U偈」A形（五節）・「散文U偈」A'形（五節）の構造が見られ、概して、重頌数が多くなれば、散文との関係が希薄になっている傾向がある。（「偈V散文U特定偈」B'形（四節）、「散文S偈」D形（六節））また、散文と重頌がほとんど連絡しない異常な節（「散文↑偈」E形）も（五節）存在する。

以上のような、經本体部の内部構造の特徴を、総合的に考えようとすれば、そこに、『楞伽經』成立に関して、次のような仮説が浮かび上がってこざるを得ない。

『偈頌品』と重複する重頌群と、散文とは、元来、別々に成立した。そのとき、偈群の方が何らかの形で散文に先行していた。經典作製にあたり、散文作者は、それらの偈群からいくつかの偈を抽出しながら、それ（ら）を大慧の所問と世尊の応答という構成の下に編纂して、解説を施した。⁽⁴²⁾ その場合、抽出した偈が一偈か二偈の場合

は、ほぼ成功した（Ⅱ四・A形、A'形）。それ以上の偈数になると（恐らく、抽出した偈全部を包括する解説は困難であったであろうため）、そのうちの特定の偈か、あるいは偈中の特定の語句（述語）に着目して、それを大慧所問の主題として註釈的に解説し、敷衍した（Ⅱ四・B'形、C形）。また、抽出した偈だけでは、散文解説が十分に反映されておらず、しかも、解説の内容は、經典全体の主要教義であった場合には、（恐らく、自ら）作成した散文要約偈を、偈群中にさりげなく挿入し、添えておいた（Ⅱ三・B形）。このような經典作製のプロセスのうち、それでも、結果的にみると、解説があまりうまくいかなかった場合や（Ⅱ四・D形）、また、（何らかの理由によって）⁽⁴³⁾失敗した場合もある（Ⅱ四・E形）。⁽⁴⁴⁾一方、散文作者は、まず自ら関心を持ち、主張したいこと（特に唯識説）を、世尊自説という形式で（重頌は作成しないまま）述べ始め（一の諸節）、後になって漸く、（恐らく自ら）作成した（であろう）重頌を散文末尾に置くようになった（Ⅱ二・A形）。（この場合、例外的に多くの重頌を持つ第六〇節と第七二節とは、『外道小乘涅槃論』、『断食肉章經』として別行していた形跡があり、元来、經本体部作製の構成とは異質的なものであって、今の散文作者の作とは思われない。また、第七一節（第四章）は、先述した如く、一種の諸節総括の試みであるから、經本体部がほぼでき上った時点で挿入されたものと思われる。）

これが、經本体部の全節の内部構造から帰納的に導き出された、筆者なりの仮説である。⁽⁴⁵⁾ただ、この仮説では、一から四の種々の構造を持った節が出来上るプロセスは説明し得ても、それらの詳細な先後関係までにはよく説明しえない。これを説明するのは非常に困難であると思われるが、もし説明できるとすれば、それは、『楞伽經』全

体の有機的構造と成立史がある程度明らかになってからであろう。

このような仮説を前提として、今一度、この經典の構造を再検討しなければ、その有効性を断定できないのはいうまでもない。そして、この仮説によって、それぞれの構造類型でのさらに詳細な思想的特徴が追求されなければならない。これらの問題は今後の課題とし、また、識者の御教示を乞うことにしたい。

ところで、もし、この仮説が是認され得るとすれば、次には、「何らかの形で散文に先行していた偈群」、いわば「原始楞伽經」の実体が問題となるはずである。それを説明することは、とりも直さず、『楞伽經』全体の構造と成立史を説明することであろう。それには、従来より放置されてきた「偈頌品」自体が問題となってくるであろうし、また、宋訳にも存する、經本体部冒頭のいわゆる「百八問答・百八句」にも照明をあてなければならぬだろう。それらの関連性を総合的に検討することによって、『楞伽經』が持つ歴史的な錯綜の綾は、徐々に解きほぐされていくはずである。

註記

- (1) 本論文で『楞伽經』という場合、梵本、チベット訳(二種)、漢訳(三種)のうち、特定の何れかを指すものではなく、それらを総称したものである。
- (2) 鈴木大拙『楞伽經研究序論』(鈴木大拙全集)第五卷、岩波書店、一九六八年、五一―五五八頁)五二四頁他。
- (3) 高崎直道『楞伽經』(佛典講座一七、大藏出版、昭和五十五年)一九頁。しかし、科文は明代の註釈家德清(『觀楞伽經記』)に新纂大日本統藏經 第十七卷、国書刊行会、昭和五十二年、三二二―三二六頁)と清代の函是(『楞伽經心印』)に統藏經、一―二七一、六八―七十頁)によって作られたことがある。德清の科文による『楞伽經』解説は山上曹源「大乘入楞伽經解題」(『国訳大藏經』經部 第四卷)参照。なお、この經典には、いわゆる流通分がない。
- (4) 鈴木、前掲書、五二四頁、同、*Studies in the Lankavatara Sutra*, London, 1930, esp. Chapter III.

- (5) D.T. Suzuki, op. cit. esp. Chapter II.
- (6) 鈴木博士の『楞伽經』研究に関して、竹村牧男「鈴木大拙と『楞伽經研究』」(『現代のエスプリ』一三三、至文堂、昭和五十三年八月、一五七―一七三頁) 参照。
- (7) 『楞伽經』に関する主要論文については、高崎、前掲書附録(二二―二七頁) 参照。
- (8) 經文を理解する上で、註釈書が不可欠であることは言うまでもない。『楞伽經』に対する註釈書はシナ、日本で数多く撰述されたが、『西蔵大藏經』中に存する、Jānasthadrā の『聖入楞伽經註』(東北 No. 4018、北京 No. 5519) と Jānavaīra の『如來心莊嚴』(東北 No. 4019、北京 No. 5520) は重要であろう。(前註釈について、羽田野伯猷「ジュニャーナ・ジュリー・パドラ著 聖入楞伽經註おぼえがき」『真なさらわら』第一号、一九七四年、六―三四頁。及び山口益「智吉祥賢の入楞伽經註について」『山口 益仏教学文集上』春秋社、昭和四十七年、二二五―二四七頁参照。) しかし、この二註釈はかなり後代の作(羽田野博士によれば、十一世紀の中葉から後葉、一九頁)であるから、その扱い方には注意が必要である。
- (9) 鈴木大拙「楞伽經」四六九―四七三頁、「楞伽經研究序論」五二七頁、前掲書所収。『仏典解題事典第二版』(春秋社、一九七七年) 九九―百頁。菅沼 晃「入楞伽經研究ノート(二)」『国訳一切經』三藏集五七。
- (10) 泉芳璟「楞伽經の偈頌品に就て」『現代仏教』第五卷五十五 昭和三年、J. Takasaki: Analysis of the Laṅkāvatāra. In search of its original form, *Indanisme et Bouddhisme*, Louvain, 1980, pp. 339-352. 拙稿「楞伽經の構造と成立史」の疑問」『印仏研』第三十三卷第二号掲載予定。
- (11) それ故に『楞伽經』は、經典というよりも論書体に近い。高崎直道、前掲書、六二頁、九二―百頁参照。
- (12) 『大日本大藏經』第十卷 方等部章疏五、鈴木學術財団、昭和四十八年。
- (13) 鈴木、前掲書、五四二頁。
- (14) 高崎博士は、師鍊の全分段を概説しておられる。(前掲書二五―五四頁。) また、巻末の附録には、それらの分段と梵本及び各訳との詳細な対照が付されているので、筆者の表と合わせて参照されたい。師鍊の八十六分段のうちのいくつかは結合した方がよい段があり、博士も試みておられるが、最終的な分節数は明記されていない。因みに、安井広済『梵文和訳入楞伽經』(法蔵館、昭和五十一年) は、經本体部を七十三項目に細分している。(そのうち「食肉品」を一項目と数えれば六十九項目となる。) 明代の智旭も、『楞伽經義疏』(『已新纂大日本統蔵經』第十七卷所収) において正宗分を三十九段に分段している。

(15) 例えば、『十地経』では、散文と重頌はほぼ完全に対応している如くである。J. Rahder & S. Susa, "The Dasabhumika sutra (Gaṭhā portion)," (*The Eastern Buddhist*, Vol. V, No. 4-Vol. VI, No. 1, Kyoto, 1931-32) 中の各地末の「散文と重頌との対照図を参照。

(16) 第七〇節（六波羅蜜について）の末尾の重頌は全て、第六九節（利那滅について）の重頌であるから、実質上、第七〇節は重頌を持たないことになる。

(17) 魏訳、唐訳では、「集一切仏法品」「集一切法品」としている。チベット訳は、*lañ kar segs pa sum khri drug ston pa las chos thams cad bsdus pa*（「楞伽三万六千」より、「一切法集品」）とあり、法蔵が言うところの「楞伽経」の三種の原典中の中本の三万六千頌よりなるものという記述を想起せしめる。（大本は十万頌、小本は千頌余りよりなるという。「入楞伽心玄義」大正蔵、三十九卷、四三〇頁）、この法蔵の説は、以後のシナの註釈書での伝統説となっている。

(18) 第六〇節中の重頌のうち、三七五偈 c d は、「偈頌品」の六五一偈 c d と全同であることを筆者は見出した。（*cittadī-śyaparīṇanad-vikalpo na pravartate*）これはまた、S. 六三三 c d とほぼ同形であることを見出した。しかし、三七七五 a b と合わせると、それら二偈は同一偈とはならないので、重頌再録なしの二の部類に入れておいた。

(19) 漢訳は三種とも八一十・十一の二偈を欠いている。また、最初の三偈は、宋訳では散文の冒頭に、唐訳では散文の途中に配置されている。また、魏訳は、第三偈と第四偈との間に「酒肉葱蒜 是障聖道分 我觀三界中 及得聖道衆、無始世界來 展轉莫非親 云何於其中 而有食不食」（大正蔵、一六卷、五六四頁上）という二偈をつけ加えている。そして同じく魏訳では、八一二 d と八一三 a b c の一偈相当分が欠けている。（八一二 a b c と八一三 d とで一偈とする。）また、唐訳は、八一五 c d を欠く。

(20) 大正蔵、三十二卷、一五六―一五八頁。これとは別に、同じく提婆に帰せられる『提婆菩薩破楞伽經中外道小乘四宗論』（大正蔵、三十二卷、一五五―一五六頁）があるが、これは「楞伽經」中の特定の節に対する註釈的なものではない。

(21) 梁、僧祐の『出三藏記集』（五一五年）で、宋訳四卷本をあげてからさらに、「楞伽阿跋多羅宝一切仏語斷食肉章經」一巻、抄大楞伽經所出、或云楞伽抄經」（大正蔵、第五十五卷、三〇頁上）としている。また、隨、彦琮等撰『衆經目錄』では、「別生」として「入楞伽經斷食肉品」をあげており（同、一九八頁上）、静泰の『衆經目錄』（六六三年）でも同様である。しかし、『歷代三寶記』（五九七年）などは、このことに対し沈黙している。

(22) 高崎、前掲書、四八頁、三七二―三九二頁。同博士「入楞伽經の意図するもの―『變化品第七』考―」（『印仏研』第二十六巻第一号、一一一―一一八頁、昭和五十二年）参照。

(23) 第二二、二三、二四節(師鍊・二六、二七、二八段)と第六九節(八四段末、註記(16)(参照)の四節の重頌のうち、下記の偈は従来までは「偈頌品」にその対応偈がないものとされてきたが、筆者は、それらの偈が「偈頌品」中にも存在することを新たに見出した。対応は次の通り。

二一四二〇 S. 三四、二一四六六 S. 四八、二一五五〇 S. 三三、六一一〇 S. 七三六。

(24) これによって上記四節の重頌は全て「偈頌品」に再録されていることになり、本論四の分類中において検討されている。「意味」についての箇所は諸本文脈が異なっており、梵本の複合語も訳しづらい。宋訳のみ「意味」を定義する一文、「謂離一切妄想相言說相。是名為義。」が明記されており、他本は全て「意味に精通する者」を説明したものである。

(25) 山口益「大乘非仏説論に対する世親の論破」釈軌論第四章に対する一解題——(山口益仏教学文集 下)所収。春秋社 昭和四十八年。(東方学会創立十五周年記念「東方学論集」(昭和三十七年)所収論文の再掲載)六六一―六六三頁。また、これら三偈について、「またいう」として S. 一五〇―一五五の六偈が引用されている。舟橋尚哉氏は、これらの三偈が、漢訳中に(つまり今の第五二節の重頌として)存在することを発見された如くであるが、(同氏「世親と楞伽經との前後論について」『印仏研』第二十巻第一号、昭和四十六年、「初期唯識思想の研究」に再録、三六七―三七七頁)、この対応は、既に、鈴木大拙の英訳中に記されている。(D.T. Suzuki: *The Lankavatara Sutra*, London, 1932, p. 236.) 經本体部と「偈頌品」両方に重出する偈はほとんど全て宋訳にも見出されるのであって、宋訳に対応偈がないことの方が重要性があると思われる。(後註参照)

(26) 第六一節では、「偈頌品」再出の三七九も、再出しない三八一、八四と共に散文と呼合している。が、三八〇、八二、八三は散文と即応しない。

(27) 第六六節の重頌六一三は、有名な指月の喩で、散文末尾にも外教徒たちの一修飾語として「ことば通りに教説に執着する」ことが触られるが、当節の重頌としてよりもむしろ、先の第五二節の重頌としてふさわしいものである。

(28) 經本体部の重頌部分に関する限り、如来蔵とアーラヤ識とを明確に同一視している偈は存在しない。散文部分において、如来蔵思想が出現しているのは第二十節と第六六節と第六九節と第七一節の四節のみであり、(第一五節で、一度だけ、円成実性を「如来蔵心 (*tathagatagarbhadhya*)」と呼んでいるが。)如来蔵・アーラヤ識同一説が經中に初めて登場するのは第六六節(第六章「利那品」)においてである。しかも、第六六節以外の三節では、「如来蔵」という語すら重頌中に現われない。ところが一方、「偈頌品」においては、自内証すべき清淨相 (*suddhilaṅkāra*) のアトマンが如来の蔵 (*garbhasaṭhaḡaṭasya*) であるところ(S. 七四六)、外教の説く見解は、アーラヤ(識)・(如来)蔵と似ているところ(*ālayaṃ garbhasa-*



- nishikanjin makam tirthavananam* (s. 七四八)、心が自性明淨で、清淨なる如来蔵である (*prakṛtiprobhasvaran cit-
in garbham tathāgatam śubham* / s. 七五〇) といっており、散文節と符合する思想が見られる。今は深く立入ることはで
きないが、このように、如来蔵・フーラヤ識同一説という、この経で最も重要な教義の一つが、成立史的観点を導入する
ことにより、従来論議されていた見方とは別の視点から眺めることができるものと思われる。このことは、別稿に譲りた
い。なお、この経の如来蔵説に関しては、高崎、前掲書、三三三―三三〇頁、三八六―三八八頁、同博士「唯心と如来蔵」
『佛教学』第九・十特集号「仏教と心」一九八〇年）、同博士『如来蔵思想の形成』（春秋社、昭和四十九年、三二六―三
三〇頁）、菅沼晃「入楞伽經の如来蔵説について」〔印仏研〕第二十二卷第二号、昭和五十二年、六七―九六頁）、勝又俊教「仏教における心識説の研究」
〔山喜房、昭和三十六年、六二四―六三二頁〕など参照。
- (29) 漢訳は全て「無行」とする。
- (30) チベット訳は、「大乘は私の乗ではなく」として大乘を主語と読むが、宋・魏訳は、「我が乗ハ大乘ニ非ズ」と、乗を主
語に読んでいる。
- (31) 重頌のうち、S. 一一四、一一五、一五六、二八六、四三七の五偈は、第四、六、一三、一五、三七、四二、五三、六七節
中に重出しているため、結局、経中に計三回現われることになる。このこと自体、経の構造に何らかの成立史的断層を伺
わせるものだろう。
- (32) 宋訳は、二一四六bcd、一四七、一四八aが欠落。
- (33) 宋訳は、二一四九bcdが欠落。
- (34) 二一六八は、散文部分（師錬の第三七段分）の内容とは全く逆の意味に解してしまう（「偈頌品」相当偈では、明らかに
逆に解している）微妙な偈である。
- (35) Cではないかと疑われる。高崎博士も、この重頌の不協和性を指摘されている。（『入楞伽經』のマナス（意）について」
古田博士古稀記念『仏教の歴史的展開に見る諸形態』（創文社、昭和五十六年）所収。特に八〇―八七頁。）
- (36) 宋訳は、二一九九が欠落。
- (37) この節のみは、五類型に収まらない。ここでは、散文と三一五がA形を取り、残り重頌四偈は、それとほとんど必然的
関係がない（E）形である。上図参照。
- (38) 宋訳は、三一二九―三三三の五偈の配置順序が諸訳と異なる。（三二、三三、二九、三〇、三一の偈順である。）

(39) 宋訳は、三一六二が欠落。

(40) 宋訳は、三一九六d、九七acdが欠落。三一九九cdは、宋訳・唐訳とも欠落。

(41) 魏訳のみは、散文末尾の増広分に対応する一偈を追加。「決定諸声聞 不行菩薩行 同入八地者 是本菩薩行」(大正藏、一六卷、五五五頁下)

(42) 散文が偈頌を解説したものであることを裏付ける今一つの重要な根拠として、第四節冒頭の、次の経文(大慧所問)があげられる。

「世尊よ、私に、心・意・意識・五法、(三)性の相についての妙華の法門、(すなわち)仏・菩薩によって従われ、自心所現の境界を遠離し、一切の説や道理や真相を顯示した、一切仏語心(*Sarvabuddhagatamānāyadvy*)を説明して下さい。マラヤ山上のランカー島にいる菩薩たちのために、大海の如きアーラ識の境界たる、如来によって(偈の形で)歌われた法の集まり(*dharmakṣyam tatvagatamugham*)を説明して下さい。」(南条本、四三頁一四行―四四頁一行。)

宋訳は、經全体を「一切仏語心品」で統一して称しているし、また、これは梵本第八章の奥書にも見られるのであるから、「如来によって歌われた法の集まり」たる「一切仏語心」とは、偈頌のみによって成り立った、『楞伽經』の原初形態なのであって、現在の『楞伽經』は、それを散文によって解説したものであると解釈することができよう。

(43) 今のところ、深入りできないが、恐らく、先在していた偈群を註釈解説したあとになお、残っていた偈を、自らの散文の末尾に、形式を整えるために配置したのであらうと推測される。

(44) 五類型に収まらない第五〇節(AE形)(註記(37)参照)に関しては、散文作者は、五偈ある重頌のうち一偈のみに注目して解説し、残り四偈は無視している。

(45) このような、筆者の仮説の一部は、高崎博士の一部と、奇しくも一致している。(例えば、經の原型が偈のみで成り立っていたとする点、それらの原素材から偈を選び出して、散文は、問答体という形で説明したという点、また、必要とあれば新たに偈を作成して増広していったというプロセスの一部など)(cf. J. Takasaki, op. cit.)その他の点については、今後の原型考察の別稿に譲りたい。

Anatomy of the Laṅkāvatāra Sūtra —a structural approach to its formation process and original form—

Chikara KUBOTA

The *Laṅkāvatāra Sūtra* (LAS), a middle -period mahāyāna Sūtra, is not a systematic text in spite of its richness in ideas and has therefore been called “a mere memorandum of Buddhist thought”. Among the ten chapters of the extant Sanskrit text Ch. 2-8 (the Sung version) can be called the main body and are usually considered to be the oldest form of the Sūtra, whereas the other three chapters, lacking in the Sung version, are viewed as later additions. The main body consists of mosaic sections, most of which have both a prose part and verse(s) [*geya*]. It has also been suggested that the tenth chapter, called *Sagāthakam* (*Sag.*) and made up of verses only, may have functioned a kind of source material of the LAS.

This paper attempts to throw a new light upon the formation process and the original form of the LAS. The main body was divided into 72 sections based on the division into 86 sections by Kokwan Shiren (虎関師鍊; 1287-1346), a Japanese commentator on the Sung version. I examined every section focusing on the relation between the prose part and the verse(s). In the course of such an anatomical examination, 5 structural patterns were roughly observed in the main body according to the following 4 types of sections:

- 1) sections without verses
- 2) sections of which not a single reappears in *Sag.*
- 3) sections of which the majority of (but not all) verses reappear in *Sag.*
- 4) sections of which all the verses reappear in *Sag.*

The 5 structural patterns according to the above 4 types of sections are as follows:

- (A) [P⊃Vs]
(A') [P⊃Vs];

Verse(s) summarize the prose part.

Characteristic for the 2nd-type sections. (except for Nos. 60, 71, 72, among Which Nos. 60 and 72 seem to have been originally different texts and No. 71 seems to have occupied a rather independent function.)

- (B) [Vs⊃P⊃a certain Vs]
(B') [Vs>P⊃a certain Vs];

Verse(s) not reappearing in *Sag.* are summarylike of the prose.

Verse(s) reappearing in *Sag.* cover prose in meaning.

Characteristic for the 3rd-type sections.

C [$V_s > P \Leftarrow$ a certain V_s part] ;

Verse(s) as a whole cover prose in meaning.

Prose seems to comment on a certain part of a verse.

Characteristic for the 4th-type sections.

D [$P \infty V_s$] ;

Only the main contents of the prose part and the verses correspond with each other.

Occurs in some 4th-type sections.

E [$P \nVdash V_s$] ;

Not any organical connection between prose and verse(s) can be observed.

Occurs in some 4th-type sections.

The 1st-type sections (mostly seen in Ch. 2) are exceptional in that Bhagavat begins his explanation without previously being questioned by Mahāmati and in that they deal with ideas particular to the *LAS*.

The A, A', B', C, D and E structural patterns can be found in the 4th-type sections.

In view of the foregoing analysis the following hypothesis can be made regarding the formation process of the main body.

The prose parts must have taken shape separately from the verses, which are common to the main body and *Sag.*. At least about 200 such verses must have existed before the prose parts. This collection of verses could have been a kind of source material of the *LAS*. Picking out some verses from this collection, the compiler(s) of the *Sūtra* commented on them in the form of a dialogue between Bhagavat and Mahāmati. In the course of this process, the compiler(s) succeeded when he (they) picked out only one or two verses (4 • A, A'). When picking out more verses, it seemed difficult for him (them) to comment on all of them and he (they) apparently paid attention to a certain part of a verse in order to focus on a particular topic (4 • B', C). In case the verses picked out were not enough to support his (their) prose, he (they) also sometimes must have added some verses (3 • B) (especially *tathāgatagarbha* = *ālayavijñāna* theory). Some sections, however, did not come out very well (4 • D) and some failed to combine prose with verse(s) (4 • E).

Besides, the compiler(s) began to express his (their) own ideas in prose without verses (1st-type sections), and later inserted new verse(s) in the latter part of the main body (2 • A). In the latter case, two exceptional sections (Nos. 60, 72) seem to have been borrowed from different texts and another section (No. 71=Ch. 7) seems to have played a rather independent role as a section summarizing the main ideas in the preceding sections (=Ch. 2-6).